躍動

芽室西中学校
1年C組

農業王国十勝に台風直撃

台無し作物収穫できず

今、北海道は、八月前半から続けて来た四つの台風に苦しめられている。その中でも特に台風十号は、強風や大雨で人々の心に深い傷を残した。

食糧自給率が100%を誇る農業王国・十勝への被害は甚大だ。台風が接近した時期は、沢山の農作物達が収穫を待っていたが、大雨により、畑のジャガイモなどは水の中へと沈んだ。続けて台風が来たため、畑は水分を沢山含んでいて、ある所では二十センチもの水がたまってしまった。

多くの新聞記事と、家が農家の人に話を聞き、台風による農業被害について考えた。

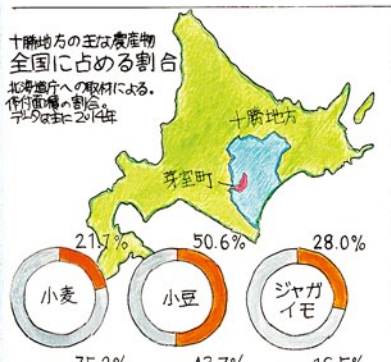
コーン缶詰は産地で変

芽室町にある、スイートコーンを加工する日本缶詰十勝工場は、台風十号による川の氾濫で浸水する事態が発生し、九月中に操業を再開することができなくなった。原料の鮮度を保つため、コーン缶詰の製造は九月末までに限られる。秋の約四十日間で缶詰や冷凍用に加工しているので、事実上今季の操業を断念するとみられる。キューピーの「アヲハタ十勝コーン・ホール」などの商品が販売停止されることになった。

契約農家によって日本缶詰工場向けに栽培されたスイートコーンは行き場を失い、収穫をせずに畑に肥料として混ぜ込む「すき込み」を行うしか方法がないようだ。

いも畑水に浸かる

同じ台風十号による被害で、ジャガイモを扱うカルビーも頭を悩ませた。十勝で生産されているジャガイモの収穫が進まなくなり、九月五日に予定していたポテトチップスの発売を、十月三日に延期した。



※朝日新聞デジタル9月4日から引用
※スイートコーンについては、農林水産省HPから独自調査

新鮮野菜と笑顔が集まる愛菜屋

芽室町にはみんなに愛されている「愛菜屋」というお店がある。芽室町の新鮮な野菜が手に入る直売所だ。始まりは、小さな無人直売所で、直売所などがほとんどない頃から営業を開始し現在に至っている。

愛菜屋で新鮮な野菜が買える理由は、生産者の皆さんが朝一番で収穫した作物を畑から直接持ち込んでいるからだ。つまり、収穫したその日に消費者の皆さんの手に渡り、食卓に並ぶ。

売られている野菜には一つ一つバーコードが貼ってあり、価格はもちろん、生産者の名前も入っている。消費者の皆さんは、生産者で商品を選ぶ事もできる。店内には生産者の写真が貼ってあり、名前と共に顔を知ることができる。生産者の写真があることで、生産者が一生懸命に野菜をつくっていることがわかるし、安心して野菜を買うことができるのだ。

芽室町でレストラン「HIRO」を開業しているシェフの高橋さんに話を聞いた。高橋さんのお店は、地元産の食材を使った洋食が食べられると評判のお店だ。毎日のように愛菜屋に通い、食材を購入しているそうだ。

また、愛菜屋の隣には「あいさいやキッチン」というお店があり、そこで使われている野菜もとてもおいしい。例えば、ホテトルネードは揚げすぎず、ちょうどよい食感でおいしい。

このように、愛菜屋は新鮮野菜が集まっている。だから、愛菜屋は、芽室町民に愛され、笑顔が集まる場所になっている。

生産者の思いが伝わってくる愛菜屋。きっと、来店したらとてもおいしい野菜が見つかるはずだ。それに、自然と誰もが笑顔になれるはずだ。

生産者の思いを込めて

愛菜屋の主な食材カレンダー

※JAめむろホームページから引用

作物名	1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月
スイートコーン	
じゃがいも	
ごぼう	
なかいも	
キャベツ	

ご当地グルメが人をつなぐ

私達は、総合の授業で十勝の産業について学習した。その中でも、芽室町の産業について詳しく学ぶために、ご当地グルメ・十勝芽室コーン炒飯について、芽室でしスストランを開業している高橋さんに講演していただいた。高橋さんは、私達のために一生懸命話してくれた。

コーン炒飯誕生

コーン炒飯が誕生したのは、二〇〇八年七月十七日だ。スイートコーンの生産量と作付面積が日本一の芽室町をPRするために誕生した。芽室町は、昼夜の気温差が大きいため、甘くておいしいスイートコーンができる。農家の方が作ってくれたスイートコーンは、町内にあるクノール食品で缶詰にされる。それがレストランで調理され、コーン炒飯となるのだ。

お店のメニューで出す時は、必ず十一個のルールを守っていて、現在芽室町の五つのお店で食べることができる。

コーン炒飯11のルール

1. 芽室産スイートコーンを使う。
2. 缶詰をザルにあける。
3. 卵2個を必ず使用し、出来上がりは黄色を意識する。
4. お米は、北海道産「きらら397」を使用する。
5. スープを付ける。
6. 具は、コーン、ベーコン、玉ねぎ、グリーンピースとする。
7. 味付けは、特性コーンバター（コーンの搾りかす入り）を使用する。
8. スイートコーンは、バターしょうゆで味付けし、すべて後載せにする。
9. 皿は、北海道産の純白スープ皿を使う。
10. 盛り付けは、中央を高くする。
11. 名称は、「芽室コーン炒飯」とする。

ご当地グルメ十勝のご当地グルメ

高橋さんにコーン炒飯のおいしさの秘訣をうかがった。すると、生産者の思いを伝えたいと思いながら、愛情をたっぷり入れて作っていることだと答えてくれた。

コーン炒飯の他にも、ご当地グルメは各地にある。清水町の牛玉ステーキ丼や大樹町のチーズサーモン丼などが有名だ。

ご当地グルメの共通点は、どれも町民や市民に愛されているということだ。ご当地グルメには、町を活性化させたり、町を元気に、楽しくする効果がある。また、その土地の作物の作付面積や収穫量が高いことをたくさんの人に知ってもらう役割もある。

私達は、このご当地グルメを、野菜などを作ってくれる生産者、加工や調理をしてくれる提供者がいることを忘れず、人と人をつなぐものとして大切にしていかなければならない。

「食」とは何か

総合学習で、「食」は作るのにはとても時間がかかるが、食べる時はすぐに終わってしまうということを知った。食べられることがあたりまえと思ってしまいがちだが、一日三食食べられることはあたりまえではない。なぜなら、生産者がいなければ食材がないし、世界には食べることのできない人もたくさんいる。

「食」を作ることはとても大変なことであり、たくさんの人に支えられている。そこで今私達ができることは、作ってくれた人への感謝の気持ちを忘れず、残さず食べることではないのだろうか。食べることができる、食べ物があることは幸せである。このことを日々意識しながら毎日の食事を口にしたい。

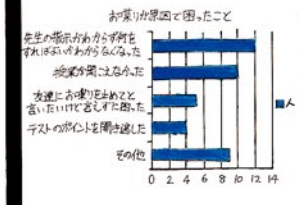
無駄なお喋りやめませんか

学級の意見発表会で、無駄なお喋りについて発表した人が二人いた。

そこで、授業中のお喋りに対する意識調査をするために学級でアンケートをとった。

結果、お喋りが気になる人は56%と、過半数を超え、気にならない人は44%となった。

次に、お喋りが原因で授業のとき困ったことは、「先生の指示がわからず何をすればよいかわからなくなった」人が12人もいた。次に多かったのが、「授業が聞こえなかった」で10人となり、勝手なお喋りで授業に支障が出ているという結果となった。



部活への思い

自分の意思で部活をしているわけではない人もいたが、多くの人は自分のために部活をしている。そして、ほとんどの人が部活を楽しいと感じている。

Q、休養日についてはどう思っているのだろうか。

A、0日・・・1人
不定期・・4人
1日・・・19人

Q、部活の休養日は週何日ですか？

A、0日・・・1人
1日・・・4人
2日・・・1人
不定期・・4人

Q、休養日の回数についてどう思いますか？

A、多い・・・4人
ふつう・・・8人
少ない・・13人

半分以上の人が「もっと休みがほしい」と考えているようだ。

私たち中学生にとって部活は大切だ。しかし、勉強や家庭の手伝いで忙しいというのも本音だ。もちろん、部活を全力でやるのは当然だ。しかし、たまには丸一日ゆっくりできる日があってもよいのではないだろうか。

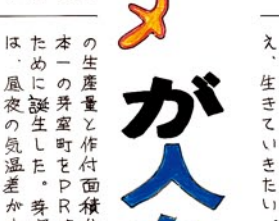
身も心もリフレッシュして、集中して練習に取り組む。そんなメリハリも必要かもしれない。

価格高騰主婦から悲鳴

帯広市では、台風の影響でニンジンの値段が急激に上がっている。十勝管内など主な産地で出来が思く、値段が二倍以上になっている。道産ニンジンの取扱量が多い東京の大田市場では、道産の相場は前の年の二、五倍となっている。

道産ニンジンの三割を占める十勝産は今年、生育不良で小柄なものが多く、一部は大雨の水に浸かり、腐ってしまった。

家が農家で、ジャガイモを作っている一年C組の柴田さんに話を聞いた。「いも畑は水につかった。いもは腐り、臭くて畑に捨てている。売上は昨年に比べてとても減ってしまった。」と話してくれた。



※毎日新聞9月10日から引用

あたりまえの幸せ

八月三十日、台風十号が上陸した。そのことが原因で家の水が止まった。つまり断水だ。その状態が半月経った今でも続いている。断水してから、今までのあたりまえに過ごしていた生活が一転した。お風呂は毎日温泉へ行き、洗濯は家でできない。必要最低限の生活用水は、大きなタンクに消防署の人が給水してくれる水を使い補っている。

「つらい」

始めは、この言葉ばかりが頭に浮かんでいた。けれど、今はちがう。

「あたりまえとは何なのだろう」

このようなことを考えるようになった。蛇口をひねれば水が出る。家に帰れる。学校に通える。学が読める。毎日食べる物がある。果たしてこのようなことは、あたりまえなのだろうか。

例えば毎日食べる物があるのは、生産者の方がいるからだ。私の家も農家だが、家族は毎日汗水垂らして働いてくれている。

今だから言えることがある。今の暮らしをっあたりまえ」だと思わないでほしい。普段の生活の中で、「あたりまえ」なことは一つもなく、全ては人々の手によってあるものなのだ。

（語り・石川真衣）

編集後記

この壁新聞は「産業」を中心に作成しました。私達は、二学期に入ってから記事なども書き、みんなで何時間も考えて作りました。限られた時間の中で、何回も記事や見出しを書き直しましたが、完成させることができました。

制作を通して多くのことを知り、「産業」について興味をもつようになりました。それと共に、一つのことに一生懸命取り組むことの大切さを知ることができました。この壁新聞制作で得た根気強さを日常でも生かしていきたいと思います。